

國學院大學學術情報リポジトリ

此のらむは静心なくを受くるなり：
或る「新説」の解釈史上における位置について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 色川, 大輔, Irokawa, Daisuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000341

「此のらむは静心なくを受くるなり」

——或る「新説」の解釈史上における位置について——

色川大輔

一、はじめに

本稿が検討するのは、次の歌（以下「八四番歌」と称する）に用いられた助動詞「ラム」に対する解釈についての或る「新説」の国語学史上の位置づけである。

桜の花のちるをよめる

きのものり

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

（引用文献一、一二頁）

以下、「新説」について触れた先行研究の一例として松尾聡『古文解釈のための国文法入門』（引用文献二）の言及を挙げて、併せて「旧説」の紹介をする。

「散る」のは明らかな事実であるのに、「らむ」を以て推量されるべきことがあらわれていないから、その理由「どうして」が言外にかくれているのだとするのである。しかしながら、そうした重大な語が特別な理由もないのに省略されると考えることは、かなり困難なことであって、かねて

専門学者の間に疑われていたのであるが、はやくは三矢重松博士（高等国文法）が簡単に、近くは松尾捨治郎博士（国語法論攷・助動詞の研究）が詳細に、この「らむ」をも、右の例に準じて解くべきであるとの考えを発表された。すなわち「花の散る」は明らかな事実であつて、「静心なく」が推量されるべき事柄だとされるのである。（九五頁）

右に見えるように、推量の対象が文中に明示されていないところから疑問の意が言外にあるのだとする「旧説」に対して、推量の内容を文中に求める解釈を提出したのが「新説」である。八四番歌については「しづ心なく」をその推量の内容であるとする。「新説」の初めは三矢重松『高等日本文法』（引用文献四）及び松尾捨治郎『国語法論攷』（引用文献六）であると考えられている。この「新説」については文法学説として提出されたものであるが、一つの解釈説として、解釈史上の位置づけを考えてみたい。

本稿では「新説」を初出とされる三矢松尾両氏のものによって代表させ、類似の説についての考察は割愛した。そして三矢松尾両氏の説と言っても、両者には内容の相違があり、また、各氏の説の内部にも展開がある。この説が提出されたことと内

部の展開について、語学史上の位置付けを併せて考えてみたい。

二、三矢松尾両氏の説——「新説」内部の展開——

ここで「新説」の内容について確認する。管見に及んだものでは、三矢氏のものでは「助動詞「らむ」の意義」、「高等日本文法」、「たび「らむ」の用法に就きて」に、松尾氏のものでは『国語法論攷』、『助動詞の研究 自他の対応を中心として』に、「新説」に関する言及があつた。以下それぞれについて見てゆく。

(一) 三矢重松の説

三矢重松「助動詞「らむ」の意義」（引用文献三所収）

久方の光のどけき春の日に

静心なく花の散るらん

は「あゆひ抄」を始め、通例「ナド」「何トテ」といふ語を添へて解釈して居る。自分の考では、花ノ散ルノハ静心ナクナラム（語氣ハウツラナイガ）といふ様に言つたもので、ナドなどを入れては歌の意が大変まづくなる様に思ふ。殊に五十嵐力氏の文章講話に、「此歌は精確を欠いてる」とやうに言つてあるのなどは最感服しかねる。但しいづれ

にしてもらんが現在動作の想像であるといふことは明で、誰れもさう思つて居るらしくばんやりと解釈してゐる。

(五六頁)

三矢重松『高等日本文法』(引用文献四)

此のらむハ静心なくを受くるなり。古説多くは「静心」の上になどをいれて解けど、それには及ぶまじ。(初版二一〇頁・二二一頁。増訂改版も二七五頁に同じ記述)

三矢重松「二たび「らむ」の用法に就きて」(引用文献五)

余思ふに、「散ルラン」のランの散る事を想像せるにあらざるは玉の緒の説の如し。されど「其の然る故を想像す」とやうに見るは非なり。ランは然る故を想像することもあれど、又其の心其の有様をも想像するなり。こゝに「静心ナク」は散ることの心又は有様にて、ランはやがて心有様を想ひやれるもの、其の上に原因を疑ふや否やは言詞以外の事にて、之を強ひて説けば却つて作意を損する事になるなり。よし「何トテ」と加へて事柄は聞えざるにあらずとも、原文に言はざる事は当れりとは断ずべからざれば、たま／＼言過ときすぎに帰すべきなり。更に言はゞ「何トテ静心ナク花ノ散ルラン」と聞く時は、ランは何トテにのみ係りて、「静心ナク散ル」をば纏めて事実と見たること、

なるべきが、さてはいたく原意に離るべく思はるゝは、此のランは飽くまで「静心ナク」に係れるもの、「静心ナク」は「ノドケキ春ノ日ニ」に対して趣向をなせるものなればなり。(三七八頁)

三矢氏は「助動詞「らむ」の意義」で「花ノ散ルノハ静心ナクナラム」と「ラム」に「静心ナク」が直接する文を作り、説明としている。管見の限りではこれが「新説」の提示された初めである。三つの論考を通じて同じ解釈を提示している。

『高等日本文法』では「ラム」について「静心なくを受くるなり」と説明しているのに対し、「二たび「らむ」の用法に就きて」では「「静心ナク」に係れるもの」と説明している。「受く」と「係れる」では説明の始点が異なる。文脈の流れから説く姿勢が「ラム」の機能の説明に転換している。文脈から助動詞の用法の説明へと論法が変わっている点には留意してよいと思う。

(二) 松尾捨治郎の説

松尾捨治郎『国語法論攷』(引用文献六)

詞の玉緒には

時鳥我とはなしにうの花のうき世の中になきわたらむ。

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびし
かるらむ。

心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見
ゆらむ。

及び「久方の光のどけき春の日に」の例歌等の特異な者と見て、「かなの意に通ふらむ」と説いて居るが、此も疑問の語が無いのを怪しんだので、矢張姉小路流に、らむは疑問文に用ゐられるのが本体だと考へたからの説である。しかしなにとて など さらずはなど 等を省くといふ説の、肯定し難いことは勿論、らむをかなの意に見るのも首肯出来ない、此はらむの上の動詞の表す事実 花の散る 鳴きわたる 等が明かに分つて居るのに、何故にらむを用ゐたかに迷はされたのであつて、此等の用例には、らむのついた動詞の表す事実以外に、別に不明な事が存在するのを忘れての解説である。之に気付かないといふよりも、忘れてといった方が適評であることは、以下説く所によつて明かであらう。

こ、を見てかしこを疑ひ、かしこをもて是をうたがふ

はね字、これは各一風にて侍る。

(姉小路手似葉伝 春樹頭秘抄)

此はらむの本義をよく悟つた卓見である。此のまゝでは解しにくいが、成章 宣長 に至つて、(中略)

らむは人をもうけ、心をも受くるあゆひ也。人をも心をもあらはしてよめるもあり。かたつ方をはぶきてよめるもあり。(あゆひ抄)

件の歌ども(前掲のかなの意の者)……皆其事を疑ふにはあらず、然る故を疑へるてにをはなり。(詞の玉緒)の如く展開して居る。此は実にらむを解くに当つて忘るべからざる要点である。然るに 成章 宣長 共に「静心なく花の散るらむ。」に之を応用することを忘れたやうに思はれる。彼の歌を あゆひ抄 玉緒 の此の説によつて図解すれば、次の如く極めて適切な解釈を下し得るのである。

見えたる物——其の事 隠れたる理——然る故(中略)

上欄の事実は明かであつて、下欄の事を疑つたのであるが、其の表現手段としては、富士谷流の所謂情の緩急による転置や和歌音数の制限等の為に、上欄の語にらむを附けたのである。(七〇九頁〜七一頁)

松尾氏はここでは、「ラム」の推量の対象が「ラム」の直上の動詞を含む句ではなく、それを隔てた「しづ心なく」であるとするについて、修辭法あるいは和歌という文体が、この現象の要因であると説明しているのである。多くの注目は「旧説」に反駁して推量の対象を文中に求めたことに集まっているが、ここではこのことに注目しておきたい。

松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』（引用文献七）

斯の如くして新古今のらむの疑問体は八五%にも達し、遂に中古の語法家をして次の如く説かしめるに至つた。

はね手にはの事らんと疑はんには、

か かは かも なに なぞ など いづ いづ
く いかん いかなる いかでか いくたび た
れ いづれ

これらの詞のいらずしてははねられぬにぞ。

（姉小路手似葉伝）

春樹顯秘抄 同増抄 も同様に説いて居る。さうして

久方の 光のどけき 春の日に 静心なく 花の散る
らむ……………
34

等を解して など なにとて 等が省かれて居るといふ様になり、真淵 宣長 成章 を初として、現代諸大家まで殆んど皆之に従つて居る。但しあゆひ抄は稍趣を異にし、何 やか の無い者を片響と称し、例歌二首を挙げて居るが、惜しいことには之はさしおき（変例）として、正例とは認めず、など等の省かれた者が正例だと説いて居る。三矢重松博士が

疑と想像とは古より混じたりけむ。（高等日本文法）

や か など上になきらむを片響と富士谷流にはいふ。なほ誤れり。……………（同右）

と説いて居るのは、語が簡単であると同時に、其の間に挙げた例に、などを挿んだ歌が多いので其の趣旨不明のやうであるが、

我身から うき世の中と 嘆きつ、 人の為さへ 悲
しかるらむ……………
35

といふ歌には、「などを入る、に及ばじ」と説いて居る所から推せば、富士谷がさしおきとしたのを誤れりと断じ、説明体のらむを認めたのに相違ない。（二六九頁―一七〇頁）然るに、形式は此と同様でありながら、全然異なつた種類の者がある。らむに 文 句 全体の事実を 疑惑 想像

の対象とする一つの力があり、更に、元来は「や」か「疑問語」の有する力を、再言的に補助するに止まつた者であるが、附属句を「疑惑」「想像」の対象とする別の力をも有するので、此の二つの力を合せて、之を強化すれば、「や」か「疑問語」の無い説明体の附属句をも「疑惑」「想像」の対象とする機能を發揮するに至るのである。

説明体の「らむ」が其の想像焦点を附属句の方に移動させる此の用法が、「らむ」の機能發揮の極致である。(一八六頁)

さて此等を疑問体に数へると、残余の説明体の「乙」(四)は、万葉には、前掲の 82 83 84 の三首にすぎないが、古今には次の十三首ある。何れも「」が不明なのである。

「心ざし」深く染めてし をりければ「消えあへぬ雪
の花と見ゆらむ」…………… 87

久方の 光のどけき 春の日に「静心なく」花の散る
らむ…………… 34 再出(一八八頁)

ここで松尾氏は

説明体の「らむ」が其の想像焦点を附属句の方に移動させる此の用法が、「らむ」の機能發揮の極致である。

と説明している。「ラム」の推量の内容が「ラム」の存在して

いる句の中に無いことになる理由を「ラム」の機能そのものに求めているのである。これは『国語法論攷』において文の構成または和歌という文体にその理由を求めていた論と大きく相違している。あまり注目されていないが、大きな変化であると考ええる。

(三) まとめ

両氏の説において、疑問副詞を補わないで解釈することと解を提供する際「静心なく」を「ラム」の推量の対象として指定していることについては、共通している。従来指摘されているとおり「新説」の議論の要点はこの二点であると考えられる。そして、その解釈を導くための説明は各論考により異なっている。

三矢氏は「助動詞「らむ」の意義」においては「自分の考では、花ノ散ルノハ静心ナクナラム(語気ハウツラナイガ)」といふ様に言つたもの」と文の係り受け構造を言い換えにより説明し、『高等日本文法』においては「此のらむは静心なくを受くるなり」と説明している。そして、「二たび「らむ」の用法に就きて」においては「此のランは飽くまで「静心ナク」に係れるもの」と述べている。『高等日本文法』では「ラム」は「静

心なく」を「受くる」ものとしているが、「二たび「らむ」の用法に就きて」では「静心ナク」に係れるもの」としているところから「ラム」を起点に説明していると考えられる。

松尾氏の場合、『国語法論攷』では修辞の問題として文構造や文体によって説明をしていたものが、『助動詞の研究』においては「ラム」の機能の問題に転換していることを先に見た。構文的または文体的説明から語法的説明への転換と言い換えられるかもしれない。

三矢氏「助動詞「らむ」の意義」『高等日本文法』と松尾氏『国語法論攷』は文の構造による説明で共通しており、三矢氏「二たび「らむ」の用法に就きて」と松尾氏『助動詞の研究 自他の対応を中心として』は、「ラム」に焦点移動の機能を認める説明で共通している。両者共に前者から後者へと論が展開したと言つてよいだろう。

ただし、三矢氏は「二たび「らむ」の用法に就きて」の発表後になる『高等日本文法』の増訂改版においては「此のらむは静心なくを受くるなり」の記述を改訂していないところから、「静心ナク」に係れるもの」との間に格別の意味の変化を設定していないのかもしれない。そうだとすれば右に書いたことは三矢氏については本稿の牽強付会になる。

とまれ「新説」としてしばしば一つに括られることのある両氏の説に変化と相違があることは、右によって了解されるであろう。

三、中近世学説概観——「旧説」の実際について——

(一) 疑問文の取扱ひ方について

ここでは、非常に粗略な形であるが、中近世における八四番歌に対する解釈説を見ておきたい。「新説」が先行学説として、語学説に限らず注釈説まで広く中近世の学説を取り扱っているところから、「新説」の位置づけを検討するために必要と考えるからである。類歌は多々指摘されているが、代表例としてよく取り上げられているところから、本稿では八四番歌に対する解説を対象とする。管見に及んだところでは以下のようなものがあつた。

堯恵『古今集延五記』

此ランハ心ニウタカハセタルラン也此類ニラントウタカハ
セル哥多^シ哥ノ心ハ春ノ日ノエンノトノトカナルニ花ハ
サハカシクチリ侍レハイカナル花ナレハカ、ル折節心ヲサ

ハカシクモテルソト思ヒヤリタル心也（引用文献八、七六頁・七七頁）

三条西実枝述・細川幽斎記『伝心抄』

久方ノ事ハ空ノ事也月トモ日トモ云是ハ日ヲモタセタリ雨風ニサソハレテ花ノ散ハ無余義是ハ日ノ影ノユフ／＼トシテアルニ散ハ何トシタル事ソト也一年十二月ノ中ニ三月ホド日モ永ク長閑ナル時ハナシ其時節ニ咲花ノイソカハシク散ソト也何トテト云事ヲ入テ見ル也為世二人ノ尋シハコノ心ハ人ノ心カ花ノ心カト問タリ兩方トモニ可然ト答ラレタルト也サレトモ花ノ心ト見ルカマサリタルト也（引用文献九、三四頁）

細川幽斎『耳底記』

ひさかたのひかりのどけきはるの日にの歌は、いかでかといふ心をいれてみるなり。詞のほかに余情あるなり。定家の歌にいかでかとはして読み給ふなり。此の歌は古今にても秘歌なり。（引用文献一〇、一四九頁）

細川幽斎『聞書全集』

らんとまり

久かたの光のどけき

此の歌不審。或は、や、何、誰など上に疑ひて、らんと留

る、是にはさやうの字なし。是古今の歌なれども、幽斎御作の百人一首の抄になにとてといふ字をそへてみるべきとあり。又此の詠格ならでうたがはずにらんと留りたる作例多し。是又不審、猶可尋之。（引用文献一〇、一〇二頁）

後陽成天皇『詠歌之大概御注』

花やちるらむとあるべきを、花のとあるは、ひかりも、長閑にゆうゆうとあるに、いかがとしたる事に花のちるぞといふ心なり。口伝にはゆうゆうとしたる春に、しづ心なくなど、花のちるぞといふ義なり。らんとただはむざとはねにくき也。此歌はなどと云詞を心にもつ疑にてはねたる也。

此などの詞口伝云云。猶此上の口伝百人一首の切紙にあり。猶又此歌の注も百人一首の鈔委くあり。（引用文献一一、四八頁）

有賀長伯『春樹顯秘増抄』

久かたのひかりのとけき春の日に

しづ心なく花のちるらむ

是もつめはねといひて又の、字はねといふ説も有つめはねの格にていへハ春の日といふもしにてつめのもしはねの格にていへハ花のといふのもしにてのへたれと猶らんの字うきて聞ゆる是ハ春日といふ下なにとてと入て聞こふか

き口伝也（引用文献一二、一六八頁・一六九頁）

姉小路実紀『竹亭和歌読方条目』

一 上にうたかひなくてはねたるもあり。

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花の

ちるらん

是は心をそへてきくなり。（引用文献一三、三九〇頁）

梅井道敏『てには綱引綱』

右等は疑のてにはもあらされとも上句に疑の意をふくめり
心はかほとひかりのとけき春の日なるにといふ心疑をふく
めり又「春の色のいたりといたらぬ里もあらし」（（6才））を
と疑の意をふくめたりよりていかてしつ心なくいかて咲る
さかさと疑の心をのつから言外に有へし（引用文献
一四、三九頁）

富士谷成章『あゆひ抄』

「らむ」のかたひびきにはその言葉の上に「など」といふ挿
頭をかぶらせて心得らるる歌もあり。また、「さらずはなど」と
と言ふ事を加ふべきもあり。これらはかならず別に疑の打合
ある歌なり。これらにはづれてすぐに心得らるるやうなる歌、
本抄にあれどさしおきの例なり。引歌、本抄に多かるうちに
少々左にあぐ。

久方の光のどけき春の日に○しづ心なく花の散るらむ。
ナド デアラウツ

（引用文献一五、二九〇頁。傍点を省略した）

本居宣長『詞の玉緒』

件の歌どもらんとは結びたれ共。皆其事を疑ふにはあら
ず。然るゆゑを疑へるてにをは也。さる故に皆かなといふ
に通へり。始に引る古今一の「心ざし深く染てし」（云々）の歌
にていはば。消あへぬ雪の花と見ゆる。其事は疑ひにあら
ねば。「花と見ゆるかな」といふ意なるを。さやうに花と見
ゆるゆゑを疑ひて。何とて花とは見ゆらんといふ意にて。
らんとは結び。然れば「花と見ゆるかな」と何とて花と見ゆ
らんといふ意也。次に同二「ひさかたのひかりのどけき」
の歌は「しづ心なく花のちるかな」。何とてしづ心なく花の
ちるらんといふ意なり。次々の歌もみな此格に同じ。いづ
れも△のしるしを附たる所に。何とてといふ言を加へて心
得べし。（引用文献一六、二二九頁・二三〇頁）

本居春庭『詞の通路』

此らんは上へ何とてといふことをいれて見る格なり（引用
文献一七、一九四頁）

東条義門『活語指南』

日ノ光リノ長閑ニユルリトシタ春ノ日ヂヤニ、ドウ云コト

デ花ハジツチリ忻々寛々トシタルシヅカナ心なく散るコト
ヤラト云哥也。(引用文献一八、一九頁。一部振仮名を省略
した)

管見の限りではあるが右を見ると、近世以前の「旧説」にお
いては省略を想定するものよりも「入れてみる」などというよ
うに疑問語を補入する解釈説が大勢であったように思われる。

(二) 疑問副詞補入を退ける解釈説について

そして疑問副詞を含んだ解釈を取る説が大勢であるが、疑問
副詞を省略したものと考える、あるいは疑問副詞を補って解釈
すべきと考える説を、紹介するものの退けているものが、右の
ように見受けられる。

後水尾院述・靈元天皇記『麓木抄』

久かたの光のとけきの歌も、下句になと、云字入てみるを
伝授にいへとも、それにも及はぬ事也。春の日に、といふ
て心をこしてみれば、をのつからなと、いふ字もこまる
事也。(引用文献一九、一七三頁)

烏丸光榮述『烏丸光榮卿口授』

一 久方の光のとけき春の日に——、三句の春の日にの、
にに力いたれば、はねらるゝ也。いかにと入てきくに
も不及と仰。(引用文献二三、五五五頁)

多田義俊記『和歌物語』

惣てうたかゝるの文字、哉・そ・もなと上に置されは、下に
らんとははねかたし。しかるに、

久かたのひかり長閑き春の日にしつ心なく花の散らん
扱は、此秋霜の歌、疑ひの詞なしに、らんとはねたり。是、
読方の習の一つなり。全体の歌に疑ひ有り。何とて花の散
らん、何とて契りの変るらんと云心にてよみたるものにて、
疑ひの詞におよはすと法皇の仰られし由、重豊卿の御物語
なり。(引用文献二三、八八一頁・八八二頁)

賀茂真淵『国歌八論余言拾遺』

また「のらんのてにをは」といふあり。古今集に「ひさか
たの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」この歌、
上におさへ字も疑ひの詞もなく「らん」とあるは、「何
とて」といふ詞を入れて見よなどいへり。これは上と下と
事の違ひたることをいひて、腰の句の「に」文字にて上を
抑へたるなり。古今集のみにもこのてにをはの歌十首余あ

るを、多くはに文字、を文字などにて上をおさへて、「らん」といひたるなり。それが中に「わが身から浮世の中と歎きつゝ、人のためさへかなしかるらん」といふは、花の散るらん・鳥の啼くらん・人のいふらんなどの、「のらん」といふべきこともなく、おさへたる字もなきなり。これ上に疑ひをあげて下に「らん」といひとちむるなり。おのづから中に疑ひの意のこもるてにをはとはいふべく、疑ひの詞を入れて見よといふは、同じ事のやうにて悪しきなり。（引用文献二〇、一二三頁）

賀茂真淵『続万葉論』

○今按に、のらんのてにをはといへども、疑字もの字もなくて、らんと、めし歌、わかれてふ、ことは色にも、あらずに、心にしてみて、わびしかるらん、我身から、うき世の中となげきつゝ、人の為さへ、かなしかるらん、如此歌に至りては、のらんと云も不通也、是は上と下と意のたがひ、ことをいふに其てにをはに、或は春の日にとおさへ、山の井の、浅き心も、おもはぬを、かげばかりのみ、人の見ゆらん、知といへば、枕だにせで、ねし物を、ちりならぬ名の、空に立らん、此外数十首皆同じてにをは也、上句下句の意たがふ趣向故、おのづから疑の心籠る也、そ

へて見るといふは、同じことの様にて誤也、（引用文献二一、一二七頁）

賀茂真淵『古今和歌集打聴』

らんとは下か上かにうたがひの詞なくしてらんといへる是をばのらむといへりと云もわるし、こは上に長閑き春の日にと云立てて下にしづ心なく花の散らんとうたがへるにて上下の間に何とてとがめてうたがふ心はおのづからこもれる也、（引用文献二二、七四頁）

これらを見ると、「などをいれて解けど、それに及ぶまじ」といった言のみであれば、事改めて「新説」と呼ばれるものではないように感じられる。

また、本居春庭『詞の通路』の図及び東条義門『活語指南』の下記の記述および図を見れば、「此のらむは静心なくを受くるなり」という言もまた、既に準備されていたということが出来る。

コ、ハなくちるトちるヘツツクなくナレバ。くハコ、ハ連用ニテツカヘルモノゾ。（引用文献一八、一九頁）
花のト云詞ヲヘダテちるヘツツク。（引用文献一八、二〇

(頁)

ただし、『詞の通路』は先に見たように「此らんは上へ何とてといふことをいれて見る格なり」と言い、『活語指南』もまた「ドウ云コトデ花ハジツチリ忻々寛々トシタルシヅカナ心なく散るコトヤラト云哥也」と解釈しており、その解釈は「旧説」である。

解釈史に見る「新説」の新しいところは、「それにも及はぬ事也」「疑ひの詞におよはす」などと言われているが、それでもなお介在していた疑問副詞補入による解釈の軀から八四番歌の解釈を解放してみせた点にある。句の係り受け構造としては「静心なくを受くる」ことが既に指摘されていたわけであるが、一歩進んで解釈上も「静心なくを受くる」形で解釈してみせることで、「旧説」から離脱したところにある。

そして、このことはもう一つ大きな側面を伴っていた。

四、おわりに

ここでは三矢松尾両氏の説がもたらしたものについて、もう一つ考えておきたい。

「新説」の新しいさは、従来提出されていた観点に拠りながらも「旧説」を排する説であつたことに先述した。

そして、本稿の考える別の側面とは、「ラム」の意味記述に關することである。疑問副詞による疑問文として解釈する説にしても、これは一種の疑問詞疑問文であると考えた説や疑問副詞を補って解釈したような意味を持つ一首であると説明するなど、程度の差が様々にあるが、そこに「それに及ぶまじ」「首肯し難い」「迷はされた」「忘れての解説である」と難じたところから、疑問副詞の補入による解釈、あるいは疑問副詞を省略する語法を認める立場と認めない立場から、それぞれ解釈と解説を提出する状況が出現した。

しかし、どちらの解釈を取るかという論点を離れると、ここで興味深いことが見えてくる。三矢氏とほぼ同じ頃、山田孝雄『日本文法論』が次のような解説をしていることに注目したい。

山田孝雄『日本文法論』(引用文献二三)

「らむ」は疑惑的推量をあらはすこと「らし」に同じく或事物によりてそれに聯關する他の事実を想像す。その異なる處は自己心中に頗疑惑する所ありて、且は疑ひ且は推量する意向を直に述べたる如き意あり。こは、純粹の疑惑的

推量と称すべきものにして、其の本性はどこまでも主観的なるなり。事実如何にか、はらず、自家が疑惑推量するなり。この故に多く上に疑惑をあらはす助詞「や」「か」を置くこと先哲既に論有り。(四四九頁)

「らむ」の意義の著しく發揮せられたるは次の例の如きに存す。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のナド散ららむ。(中略)

の如きは必上に「何故に」などいふ疑惑の意を添へて解せざるべからず。これ亦かの「らし」にはなき処なり。(四四九頁・四五〇頁)

これと「新説」を形作るものの一つである松尾氏「助動詞の研究 自他の対応を中心として」は、助動詞「ラム」について、「著しく發揮せられたる」「發揮の極致」と類似的表現で評価しているが、その「發揮」したものは、片や「意義」片や「機能」であるとしている。

「意義」であるとすればそれは「ラム」の意味そのものの中に増減や動揺があるという記述を意味するが、「機能」とすれば、そのような動揺を認めない考え方ということになる。後者は「ラ

ム」の意味概念をほぼ單一化することに繋がる。

そして解釈から「疑い」を排除することは、推量の助動詞であるとされる「ラム」の「推量」の概念規定の検討に寄与することとなったものと思われる。

以後の研究では「旧説」の解釈を踏襲するとしても、「ラム」そのものの意味の拡張により説明するものは稀であったように思う。それは「詞のほかに余情あるなり」(細川幽斎『耳底記』)という説明の継承と言うことも出来るかもしれない。

ある意味では、「意義」の拡張によつて説明しようとした山田孝雄『日本文法論』は、「詞」の中に「余情」があるという大胆な主張だったのかもしれないが、この方向は注目されることも稀に、「山田博士の説も大体同様である」(松尾捨治郎『国語法論攷』。引用文献五、七〇九頁)とされた観がある。この点については追つて考えたい。

そして以後は「などをいれて解けど、それに及ぶ」べきかどうかは、一つの論点になっていった。この論点は、文法學説上の論点としてよりも、個々の文学作品の解釈上の論点として、影響力を残した観がある。文学作品解釈上の受容状況について、また追つて考えたい。

【注】 引用文中の漢字の字体は私に改めた箇所がある。傍点傍線等装飾は文中断らない限り原文ママ。合点は「」で代用した。

【引用文献一覽】 (本稿中の初出順に配列した)

- 一、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編 歌集』(角川書店、昭和五十八年二月)
- 二、松尾聡「古文解釈のための国文法入門」(研究社出版、昭和二十七年一月)
- 三、三矢重松「助動詞「らむ」の意義」(『国学院雑誌』第二二巻第三号、明治三十九年三月。後に引用文献四増訂改版および参考文献一に所収。本稿では『国学院雑誌 第二二巻』(第一書房、昭和五十二年二月)による復刻版を使用した)
- 四、三矢重松『高等日本文法』(明治書院、明治四十一年二月初版、大正一五年一月増訂改版)
- 五、三矢重松「たび「らむ」の用法に就きて」(『わか竹』第五巻第七号、明治四五年七月。本稿では参考文献一所収本文を使用)
- 六、松尾捨治郎「国語法論攷」(文学社、昭和二十一年九月。白帝社、昭和三十六年一月)
- 七、松尾捨治郎「助動詞の研究 自他の対応を中心として」(文学社、昭和十八年二月)
- 八、秋永一枝・田辺佳代「古今集延五記」(笠間書院、昭和五三年八月)
- 九、伝心抄研究会編『古今集古注釈書集成 伝心抄』(笠間書院、平成八年二月)
- 一〇、佐佐木信綱『日本歌学大系 第六巻』(風間書房、昭和三二年四月)
- 一一、列聖全集編纂会『御撰集 第四巻』(列聖全集編纂会、大正五年六月)
- 一二、根来司解説『姉小路式・歌道秘蔵録・春樹頭秘抄・春樹頭秘増抄』(勉誠社、昭和五二年二月)

- 一三、近世和歌研究会編『近世歌学集成(中)』(明治書院、平成九年一月)
- 一四、福井久蔵編『国語学大系 第八巻』(国書刊行会、昭和十四年九月)
- 一五、中田祝夫・竹岡正夫『あゆみ抄新注』(風間書房、昭和三五年四月)
- 一六、大野晋編『本居宣長全集 第五巻』(筑摩書房、昭和四五年九月)
- 一七、島田昌彦解説『詞の通路 下』(勉誠社、昭和五二年二月)
- 一八、岡崎正継解説『活語指南 友鏡他』(勉誠社、昭和五一年一月)
- 一九、近世和歌研究会編『近世歌学集成(上)』(明治書院、平成九年一〇月)
- 二〇、佐佐木信綱編『日本歌学大系 第七巻』(風間書房、昭和三二年一〇月)
- 二一、久松潜一監修・鈴木真喜男編『賀茂真淵全集 第一〇巻』(統群書類従完成会、昭和六〇年三月)
- 二二、久松潜一監修・鈴木真喜男編『賀茂真淵全集 第九巻』(統群書類従完成会、昭和五三年九月)
- 二三、山田孝雄『日本文法論』(宝文館、明治四一年九月)

【参考文献一覽】 (発表年次に沿って配列した)

- 一、三矢重松「国語の新研究」(中文館書店、昭和七年九月)
- 二、千田幸夫「助動詞「らむ」の表現性について」(鹿児島大学文学部研究紀要 文科報告 第二号、昭和二十八年三月)
- 三、馬淵一夫「しづ心なく花の散るらむ」(『平安文学研究』第一六輯、昭和二十九年十二月)
- 四、青島徹「疑問副詞の省略」(『国語と国文学』第三三巻第一号、昭和三〇年一月)
- 五、宮坂和江「しづ心なく花の散るらむ」(『解釈』第一巻第五号、昭和三〇年九月)
- 六、尾崎知光「らむ」の意味について」(『文学・語学』第九号、昭和三三年九月)
- 七、保坂弘司「らむ」の研究」(『国文学 解釈と教材の研究』第四巻第

- 二、昭和三十三年二月)
- 八、山田珠子「助動詞「らむ」の通時的考察」(学習院大學国語国文学会誌 第三号、昭和三十四年一月)
- 九、馬淵和夫「古文の文法別記」(武蔵野書院、昭和三十八年二月)
- 一〇、浅見徹「助動詞の展開―「らむ」の場合―」(岐阜大学研究報告―人文科学― 第一四号、昭和四十一年三月)
- 一一、橘誠「文法による和歌へのアプローチ (二) ―み・なくに・らむ・已然形+や・べらなり―」(月刊文法 第一卷第四号、昭和四十四年二月)
- 一二、保坂弘司「らむ(らん)―推量(古典語)」(松村明編者代表『古典語助動詞助動詞詳説』(学燈社、昭和四十四年四月) 所収)
- 一三、阪倉篤義「中古語法の特質と解釈上の問題点」(国文学―解釈と教材の研究― 第一四卷第七号、昭和四十四年五月)
- 一四、築島裕「平安時代語新論」(東京大学出版会、昭和四十四年六月)
- 一五、此島正年「国語助動詞の研究」(桜楓社、昭和四十八年一〇月)
- 一六、吉田五衛「かなの意に通ふらむ」(国語国文学 第一九号、昭和五十五年五月)
- 一七、滝沢貞夫「王朝和歌にみられる「らむ」について」(佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集刊行会編『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』(表現社、昭和五十二年二月) 所収)
- 一八、有馬煌史「助動詞「らむ」の用法について」(岐阜工業高等専門学校校紀要 第二十二号、昭和五十二年三月)
- 一九、坂口頼孝「ナゼを補うへらむ」私見」(国学院雑誌 第七八巻第五号、昭和五十二年五月)
- 二〇、種友明「「静心なく花の散るらむ」の類歌について」(浅野信博士古稀記念国語学論叢』(桜楓社、昭和五十二年一〇月) 収載)
- 二一、佐伯梅友「しづ心なく花の散るらむ」(古文研究)でなおし第二号、昭和五十二年二月)
- 二二、今井正「疑問推量の「らむ」について」(宇部短期大学学術報告 第一五号、昭和五十四年一月)
- 二三、遠藤和夫「助動詞「らむ」の口語性」(田邊博士古希記念国語学論集編集委員会編『田邊博士古希記念 国語助動詞助動詞論叢』(桜楓社、昭和五十四年八月) 所収)
- 二四、武田孝「推量の助動詞」(研究資料日本文法 第七卷 助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』(明治書院、昭和六〇年四月) 所収)
- 二五、堀口和吉「しづ心なく花の散るらむ」考」(山邊道 第三〇号、昭和六一年三月)
- 二六、辻田昌三「古今集時代の「らむ」の一面」(文林 第二三三号、昭和六三年二月)
- 二七、鈴木義和「しづ心なく花のちるらむ」型の文について」(藤岡忠美編『古今和歌集連環』和泉書院、平成元年五月)
- 二八、山口堯二「喚体性の文における疑念の含意―しづ心なく花のちるらん」の基底」(『日本語疑問表現通史』(明治書院、平成二年一月) 所収)
- 二九、山田潔「しづ心なく花のちるらむ」考」(国学院雑誌 第九四巻第四号、平成五年四月)
- 三〇、小川輝夫「和泉式部日記の歌の解釈試論 (二) ―しづ心なく花の散るらむ」の解釈とともに―」(北九州大学文学部紀要 第四九号、平成六年七月)
- 三一、野村剛史「三代集ラムの構文法」(川端善明・仁田義雄『日本語文法体系と方法』(ひつじ書房、平成九年一〇月) 所収)